平成２７年９月

試験的なサバ類個別漁獲割当（ＩＱ）の実施について
（北部太平洋海区大中型まき網）

１　平成２６年度ＩＱ試験管理

（１）　昨年７月の「資源管理のあり方検討会とりまとめ」を受け、北部太平洋海区で操業する大中型まき網漁船の一部（５隻）を対象に、昨年１０月～本年６月までの試験的なＩＱ管理を実施した。

（２）　しかしながら、①２０１３年級群の大量発生により小型魚寡占の漁場形成となったこと、②試験的ＩＱ管理が初年度であったため、ＩＱ方式を活用した操業を十分に行うことができなかったこと等により、ＩＱ対象船による創意工夫ある操業発揮が確認できない結果となった。

２　２７年度ＩＱ試験管理の基本的方針

２６年度のＩＱ試験管理の結果を考慮し、２年目の２７年度においては以下の方針で実施する。

（１）北部太平洋海区で操業する大中型まき網漁船（１そうまき）の全船を対象に、サバの盛漁期に当たる本年１０月～３月の６ヶ月間、試験的なＩＱ管理を実施する。

（２）ＩＱ管理期間の前半（１０月～１２月）は月別にＩＱを設定し、後半（１月～３月）は一括のＩＱを設定する。

（３）ＩＱ試験管理の実施に当たっては、北部太平洋まき網漁連がＩＱ枠の配分、遵守措置等を定めたＩＱ管理実施計画を作成し、水産庁がこれを確認する。

３　データ収集、監視・取締り

（１）試験的ＩＱ管理期間においては、水産庁としてもＶＭＳによる対象船の航跡把握、水揚げ検査の実施を通じ、ＩＱ管理を支援する。

（２）　漁業操業、水揚げ等に係るデータを収集し、研究機関で、ＩＱ管理の効果・課題等について検証を行う。

26年度試験的IQ管理の実施結果

１．試験内容

専ら北部太平洋海区において収益性向上のための実証事業に取り組んでいる大中型まき網漁船（10隻）の半数（５隻）を対象として、サバの漁獲が本格化する平成26年10月から平成27年６月末までの間、試験的なIQ管理を実施し、非IQ船（５隻）との間で漁獲量、漁獲物の組成・価格、操業パターン等について比較・検証を行った。

	当初のIQ枠	再設定されたIQ枠
IQ船①（２隻）	7,100t	8,300t
IQ船②（３隻）	6,000t	7,100t

※IQ船①は、サバ・イワシ専業船

※IQ船②は、カツオ・マグロ操業併用船

※当初枠は過去５年の平均水準をもとに設定。卓越年級群の発生を踏まえ、IQ船と非IQ船の間の格差是正のため、漁期途中にIQ枠を再設定。

２．試験結果（サバ主漁期である10月～翌3月のデータによる）

(1)事前ヒアリング結果

IQ枠を計画的に利用すべく、より価値の高い魚を、その日の漁場において、又は季節を選んで計画的に漁獲しようとする意識が見受けられた。

(2)操業の結果

①約30年ぶりの大発生群である2013年級群により、小型魚寡占の漁場形成となり、中・大型魚を選択して漁獲することは難しい状況であったこと、②試験的IQ管理が初年度であったため、IQ方式を活用した操業を十分に行うことができなかったこと等により、IQ船による創意工夫ある操業発揮は確認できなかった。

①サバの漁獲量

IQ船の漁獲量は非IQ船よりも少なかった。

	漁獲量	(a)/(b)
IQ船の平均	4,830t (a)	78%
非IQ船の平均	6,168t (b)	

（参考）水揚げ日数、１日当たりの投網回数、１日当たりの漁獲量

	水揚げ日数	投網回数／日	漁獲量／日
IQ船の平均	28日	1.46	172.4t
非IQ船の平均	32日	1.60	198.1t

②平均魚体サイズ・平均単価

IQ船、非IQ船の間で有意な差は見られず、船ごとの差が大きかった。

	魚体サイズ（指数）	単価（円／kg）
IQ船	平均 2.11（2.05～2.20）	平均 69.2（61.1～76.6）
非IQ船	平均 2.18（2.08～2.33）	平均 72.5（65.9～85.6）

※括弧内は船ごとの実績のうち最大と最小のもの。

※魚体サイズは、銘柄別に、大サイズを４、中サイズを３、小サイズを２として算出。

③コスト削減・漁場選択等

非IQ船との間で基本的な操業パターン（漁場の選択、出漁時期、操業回数等）に有意な差は確認できなかった。

④監視・取締り

TAC情報システムによる漁獲実績把握、水揚検査（８回）、取締船の派遣、衛星船位監視システム（VMS）による航跡把握等により監視・取締活動を実施した。